

前回平成 15 年度調査においても、2～10 期ごろまでの比較的長期にわたる土器群が検出されている。今回の調査区では 7・8 期前後の土器を主体とするが、3 期～9 期頃までの確認できた。本遺跡は、弥生後期以降、自然堤防上で中心域を時期ごとに移しながら古墳中期初頭ごろまで存続したことが分かる。

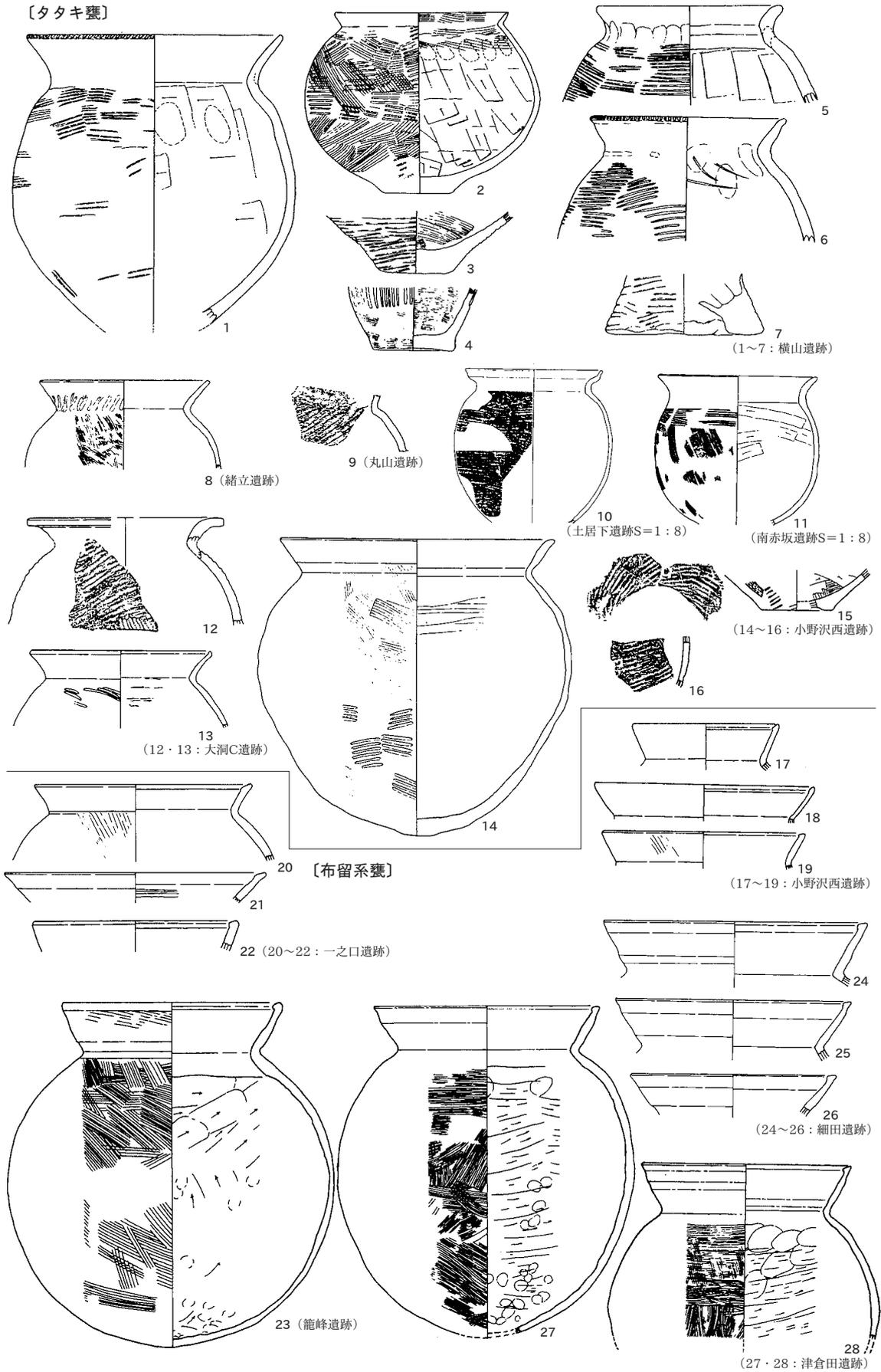
## 2 畿内系甕（タタキ甕・布留系甕）と遺跡の性格

県内において、外面にタタキ調整をもつ土器は、新潟市葛塚遺跡（包含層：6 期？）[関 1999]、同緒立遺跡（C 地区：柵渠部一括・詳細時期不詳）[渡邊ほか 1994]、同南赤坂遺跡（下段テラス：8 期）[前山ほか 2002]、長岡市横山遺跡（環壕：4・5 期）[駒形ほか 1987]、長岡市草薙遺跡 [未報告]、上越市津倉田遺跡（SK24：10 期か）[笹澤ほか 1999]、同市丸山遺跡（2 期）[小野ほか 1988]、妙高市大洞原 C 遺跡（包含層：単体のため時期不詳）[三ツ井ほか 1997]、同市小野沢西遺跡（SD2：時期不詳）[土橋 2004] 等の出土資料が知られている。いずれの事例も単体もしくは数点のみで、土器群の組成の中では少数かつ客体的なあり方を示している。一方、下割遺跡については、平成 15 年度本発掘調査の 03SX1317、03SX1318 等で出土した分を含めると、畿内系が出土するほかの遺跡と比べても突出して多く出土しており、器種構成において特異なあり方を示す。当遺跡出土のタタキ甕は、屈曲部（頸部）内面の稜が鋭角なものが多く、胴部は球胴（32・88・89 など）で、胴部上半は右上がりのタタキ調整、胴部下半はハケ調整（32・89 など）が見られる。いわゆる庄内式河内形甕 [寺沢 1986] の特徴に類似し、畿内出土のタタキ甕の変遷観 [杉本 2006・西村 2003] との比較では、布留式期 I [米田 1991]・布留 1 式 [寺沢 1986] に対比でき、本遺跡出土土器群の年代観（7・8 期併行期）とおおむね整合する。ただし、当遺跡出土土器の底部のつくりは、平底を主体としており、尖底・丸底を指向する河内・大和の様相よりも、平底の指向が強い和泉地域の土器群 [西村前掲] に近い印象がある。系譜等について、畿内周辺地域（伝播ルートの地域）も含め、今後、改めて比較検討を行いたい。

一方、当遺跡では、布留系の甕（51・66・90・124）も出土しており、タタキ甕同様、畿内系の影響が見られる。頸城平野周辺において布留系の甕が出土した遺跡は、本遺跡のほか、上越市津倉田遺跡 [笹澤ほか前掲]・一之口遺跡西地区 [坂井ほか 1986]・横引遺跡 [小池ほか 1995]・籠峰遺跡 [野村ほか 2000]・妙高市小野沢西遺跡 [土橋前掲] などがある。なお、土器胎土の観察では、124 を除き、いずれも在地系の土器群の胎土と大きな差異は認められず、他地域からの搬入品ではなく、畿内系の製作技法を用いて当地周辺で製作された土器群であると推定される。また、口縁部のつくり（在地系よりも外反の度合いが強く、屈曲部内面に稜を持つ）が畿内系を踏襲するものの、胴部をハケ調整し、長胴気味の器形をもつ在地との折衷と見られる土器群（42・105）が含まれることも、同一遺跡の中で畿内系の伝播と定着・変遷を示す資料として注目される。

北陸地方においては、加賀以西を中心に畿内系の「布留甕」が盛行するが、越中の東部を境としてその分布が確認されていない。こうした畿内系の甕については、主に太平洋側を中心に分布しており [早野 1996]・[西川 1992]・[佐々木 2005]、北陸地方を通じた伝播ではなく、東山道（東海・信州・関東地方）を介し、関川水系の内水面をたどって平野周辺に拡散したものと考えられる。頸城平野周辺の畿内系を伴う遺跡においては、信州系の影響が一定量見られることも伝播ルートを考える有力な手掛かりとなろう。

本遺跡の平成 15 年度調査の調査範囲では幅 12～25m の旧河川を検出し、河川沿いの微高地（自然堤防）上に柱穴に礎板を持つ棟持柱建物をもつ [山崎 2004]。周辺では、古墳時代後期と推定される一之口遺跡西地区 SB187（1 間×3 間以上）が、柱穴に礎板を伴う [坂井ほか 1986 前掲]。その他、県内において、



第11図 県内のタタキ甕と高田平野周辺の布留系甕 (個別にスケールを示したものを以外すべてS=1:4)

当該期の礎板を持つ掘立柱建物の類例は少ない。佐渡市蔵王遺跡では、大型の礎板をもつ平面正方形（1×1間）の建物跡が確認されている。その他、布掘りで地中梁を持つ大型建物や周溝を持つ大型建物もあり、鏡（内行花文・珠文）・銅鏃・ガラス玉・鳥形土製品・ミニチュア土器など祭祀行為に関連する遺物とあわせ、新穂玉作遺跡群の中でも核となる遺跡である〔山口 2006〕。

下割遺跡の性格については、遺跡範囲の一部の調査であること、土器類以外に遺跡の性格を示すような遺物の出土がないことなどから推測の域は出ないが、畿内系土器（甕）が卓越している点や県内では希少な構造の建物を持つことを合わせて考えると、畿内に近い関係にある集団が水系沿いに形成した拠点的な集落跡である可能性がある。今後の周辺地区の調査の進展を待つてより詳細な検討を行いたい。

## 3 土器集中遺構について

遺跡では、土器が一定の範囲（ブロック）にまとまって出土した場所が 11 か所確認された。平成 15 年度の調査でも土器のみの集中か所が 6 か所確認されており、本遺跡の遺物分布の特徴的な在り方といえる。また、器種構成についても、正位の状態で器台が出土した 08SX21 を除き、甕を主体とするものが大半を占め、とくに畿内系の甕が多い点も特筆される。図化は口縁部及び底部資料が中心となったが、復元には至らなかったものの、胴部破片も定量出土しており、細片化した土器の集合体ではなく、個体もしくはそれに近い状態の土器から構成されると考えられる。出土状況は、正位もしくは、本来は正位のものが横倒しとなった状態のものが目立ち、人為的行為により意図的に配置された可能性が高い。しかし、祭祀を想起させるような明確な規則性等は確認することはできなかった。糸魚川市横マクリ遺跡においても底部を欠くが、甕が正位で配置される事例があり、何らかの習慣や行為が反映した可能性が指摘されている〔渡邊ほか 2008〕。本遺跡もそうした何らかの意図に基づく土器類の集中・集積行為と考えられる。

これらの土器群は遺物包含層とした IX 2 層の上面から 5cm ほどの深度にまとまる傾向が見られた。各遺構にかかる土器片の間に大きな高低差は見られず、おおむね平坦もしくは中心から外側にわずかに立ち上がる「皿状」の水平分布をとる。遺構としての掘り込みが確認できたのは 08SX117 のみであるが、これについても平面不整形で深度が約 10cm 程度と浅い皿状である。その他も、明確な遺構プランと掘り込みを持たないことや、土器についても大きく時期差が認められないことなどから、ごく短期間に営まれた遺構であろう。

一方、遺構としては認識できなかったものの、IX 2 層では上面に 2～3cm の厚さで遺物を含む炭化物層が見られた。この炭化物層は調査範囲全域での広がりには認められず、調査区東側の遺物出土量が多い部分に偏在する傾向にあり、遺構・遺物の分布状況ともほぼ整合する在り方と言える。

第 VI 章に示した 14 ライン東壁基本層序の土壌分析結果によれば、人為的活動痕跡を示すとされる微粒炭量は遺物包含層と認識した IX 2 層よりも上位の IX 1a 層の方が多く、IX 1a 層からの遺物の出土量は IX 2 層に比べ少量である。IX 1a 層と IX 2 層の間には基本的に無遺物層（一部で遺物含む）で固くしめる粘質土の IX 1b 層が存在する。人為的活動痕跡は顕著に認められるものの、出土遺物が減少することから、IX 1b～IX 1a 層の段階に、遺跡の中心地区の変化や居住域から生産域への変化など、土地利用の在り方が大きく変わったことが推測される。遺跡の空間利用の変遷については、今後、周辺の調査により明らかになるものと期待される。